1
われわれは、「われわれ各人の魂は、肉体のいたるところに全体としてそなわっているのであるから、一体をなしていると主張しており、その魂の成る部分は肉体のここにあるが別の部分は、そこにあるわけではないのであるから、そのような意味では、われわれ各人の魂は、事実のうえでも一体をなしているのである

3 そのような意味では、われわれ各人の魂は、事実のうえでも一体をなしているのである

4 そして感覚作用を営む生きもののばあいにも、同様に感覚作用を司る魂が生きものの いたるところに偏在しており、また植物のばあいにも、その各部分のいたるところに、植物的な作用を営む魂が全体として偏在しているのである

6 すると、はたして、私の魂もあなたの魂も、いや、すべての魂が、そのような意味で一体をなしているのであろうか

8 そして、宇宙のばあいにも、万有に内在する魂は 異において部分に分けられているのではなくて、万有のいたるところに、そのものとして偏在しているのであろうか。一体をなしているのであろうか

9 私の内なる魂は一体をなしているのに、なぜ、万有の内なる魂が一体をなしていないことがあろうか

10 宇宙の魂も、高でもなければ物体でもないのである

そこで、もし私の魂もあなたの魂も宇宙の魂から生じたものであって、その宇宙の魂が一体をなしていたのであれば、私の魂とあなたの魂は一体をなしているのでなければならないことになるであろう

12 だが、これに対して、もし宇宙の魂も、その魂からもこの魂から生じたのであれば、その時でもやはり、すべての魂が一体をなしているのではなければならないことになるであろう

では、その一なる魂とは、どのような魂なのであろうか

14 しかし、その問題よりも先に、「各個人の魂が一体をなしているように、すべての魂は一体をなしている」という主張が正しいのかどうか、ここで検討してみる必要がある

15 というのも、もし私の魂と別の成る人の魂が一体をなしているとすれば、奇妙なことが起こってくるからである

16 すなわち、私が知覚すれば別の人も知覚することにならなければならなかったであろう。私が善人であればその人も善人であらねばならず、私が欲求すればその人も欲求するのでなければならないことになったであろう。

一般的に言って、われわれはたがいに経験を同じく し、かつ宇宙とも経験を同じくしなければならないことになって、結局は、私が作用を受ければ宇宙もこれに気付かねばならないことになったであろう

どうして或る魂は動物に宿り、別の魂は植物に宿るのであろうか

20 それに、すべての魂が一体をなしているとすれば、どうして或る魂は分別能力があり、別の魂には分別能力がないのであろうか

22 だが、他方、もし「すべての魂は一体をなしている」とみなすべきではないとすれば、宇宙は一体をなしているのではないことになるであろう。魂たちの一つの源を見出すこともできないことになるであろう

2
事実、まず第一に、私の魂と別の人の魂が一体をなしているとして も、そのことが直ちに「合成体(としての私と合成体(としての別の人)が同じであること」に結びつくわけではないのである

なぜなら、二つの異なった肉体に同じものが宿っていても、その同じものがそのニつの肉体のなかで同じことを経験するわけではないのである

肉体を動かす、魂が、内なる人間である

4 たとえば、動いている私の内なる人間のばあいがそうである

5 すなわち、私は動いていて、あなたは動いていないばあいに、私の内なる人間は動いているけれども、あなたの内なる人間は静止しているのである

7 そしてこのばあいに、「私の内なるものとあなたの内なるものは、同じものの(同じ魂)であるとは考えても、別に奇妙なことでもなければ、人びとの考えるほど不可解なことでもないのである

9 だから、必ずしも、「私が知覚すれば、他の人もまったく同じことを経験する」ということにはならないのである

10 なぜなら、一つの肉体のばあいでも、一方の手の経験を感知するのは他方の手ではなくて、その肉体全体に宿っている魂だからである

11 だから、もし私の経験をあなたも知るのではなければならないとすれば、その前に、私の肉体とあなたの肉体は合成体となる一つの肉体となる必要があったであろう

14 他方、一つの肉体に起こることでも、全体としてはこれに気付かないことも多く、肉体の高が大きければ大きいほど、その傾向があると考えるのが妥当だろう

15 たとえば巨大な海棠動物のばあいに言われることであるが、たとえその部分が何らかの作用を受けても、その刺激が微小なので身体全体では少しも意識されないばあいがこれに当たるといえよう

そのようにして、私の魂とあなたの魂が結びついた時にのみ、同じことを知覚することになるのである

19 つまり、或る一部分が影響を受けても、それのテュポス(印象)に対する感覚知覚が明らかに経験とって全体のすみずみにまで達するとは、必ずしも言えないのであって、そこにシュンパスケイン(共感)があることは不合理でもなければ否定すべきことでもないのであるが、しかし、感覚されるの印影が伴われるとは、必ずしも言えないのである

23 なお、同じものが或る人のなかでは動き、別の人のなかでは静止していることが不可能ではないとすれば、われわれの魂が私のなかでは徳を持ち、別の人のなかでは悪徳を持つとしても、別に奇妙なことではないであろう

24 なぜなら、われわれは、「多には絶対に与らない」という意味でだけわれわれの魂は一つであるとも言っているのではなくて

――なぜなら、そういうことは、われわれの魂よりも優れたピュシス(もの)にのみ許されるべきことなのであるから――

「われわれの魂は一つであり、かつ多でもあるのであって、<諸物体の領域に生じる分割可能な有>を分有するとともに、他方では<不可分な有>を分有する、だから、われわれの魂は一つであると言っているからである

29 なお、私のばあいに例をとってみると、私の一部分に生じた感覚は必ずしも私の全体に影響を及ぼすわけではないけれども、私のなかの<より高度の原理>に生じたことは、部分に何らかの影響を及ぼすのである

30 これと同じように、われわれからの作用が宇宙全体に寄与するかどうかは明らかではないけれども、宇宙から個別的なものに影響が及ぶことは明らかである

なぜなら、われわれはばばば全体者と経験をともにすることがあるからである

3
さらに、別の諸々の事実からも理が告げるように、われわれはたがいに共感しもするのである

すなわち、われわれは見てもに苦しんだり、見て和らいだ気持ちになったりするのであって、もともと他人への愛に惹かれる者なのである

3 そして、つまるところ、このトーレイン(友愛)は、おそらく共感に基づいているのであろう

それに、もし咬文や一般に言葉が人びとをたがいに引き寄せたり、遠くにいる人びとに共感を起こさせたりするのであれば、それは疑いもなく、誠が一つで一体をなしていることによるのである

6 それにまた低い声で静かに語られたことばが遠くのものに影響を与え、測り知れない仕と離れた場所にあるものに耳を傾けさせることもあるのである

8 これらの事実からして、「魂は一体をなしているから、すべてのものは一体をなしている」という事実をすることができるであろう

10 では、もし魂が一つで一体をなしているのであれば、どうして或る魂には分別能力があるが、また或る魂には植物的な魂でさえあるのであろうか

13 魂の不可分な部分は肉体のなかで分割されるのではないのであるから、これを分別能力のあるものの頭域に配置しなければならないが、肉体にかかわって分割される部分は

――この部分もそれ自体ではーつであるけれども、肉体にかかわって分割されることにより、その肉体のいたるところに感覚を提供するのである――

これを魂の別の能力とみなさねばならず、また魂のうちで肉体を形成し制作する部分も、これを別の能力とみなさねばならないのである

17 だが、魂の能力が多様だからといって、魂が一つでは多様なる一が生じるからである

18 なぜなら、種子に宿る能力も多様であるが、種子は一つで、このーつから多様なる一が生じるからである

19 すると、それらの能力のすべてが肉体のいたるところに あるわけではないのなぜであろうか

20 一つの魂が肉体のいたるところにあると言われるばあいでも、感覚それの肉体のあらゆる部分に似ているものとして位置を占めているわけではないし、ロゴス(分別能力)も肉体の全体に位置を占めているのではなく、本植物的な能力も、感覚が位置を占めていない部分にも位置を占めているのである

23 とすると、なぜその栄養を司る能力は、われわれの魂からも派生しなかったのであろうか

だが、もし肉体の栄養を司る能力が全体者に由来するのであれば、その能力は宇宙霊そのものでもあることになる

25 栄養を与えられて養われるものは全体者の一部分だからであって、この部分はまた受動的にのみ感覚を持っているのである

もしこの全体者に形成作用があってはならないのであったら、個別的な魂が形成作用を行なったであろう

22 しかし、そのあとは、ロゴスの栄養を司る能力は、われわれの魂からも派生しなかった栄養を与えられて養われるものは全体者の一部分だからであって、この部分はまた受動的にのみ感覚を持っているのである

26 これに対して、知性の助けを借りて判定を下す感覚は個別的なものに属するのであって、個別的な魂は全体者によって形成されているものを、その感覚によって形成する必要がなかったのである

4
すべての魂を一つ一つと選択しても疑を惜しむことのないようにと、以上のことが述べられたのである

しかし、魂はどうして一つであるのか、さらに筋道を追って調べていくことにしたい

では、はたして、すべての魂は一なる魂から生じるから、一つなのであろうか

もし一なる魂から生じたのであれば、その一なる魂が分割されることによって、多なる魂が生じるのであろうか

4 それとも、その一なる魂は全体としてどこまでいっても、自分自身の側から多なる魂を作りだすのであろうか

5 だが、自分自身は一なる魂としてとどまりながら、その自分自身から、どのように して多なる魂を作りだすのであろうか

7 そこで、われわれは神の御加護のおらんことを祈ったうえで、もしはんとうに魂が多であれば、それ以前には一なる魂がなければならず、その一なる魂から多なる魂が生じるのではなければならない と言うことにしよう

9 かくして、もしその一なる魂が物体であれば、その物体が分割されることによって多くの個別的な魂が生じるのではなければならず、その際に生じる個別的な魂は、そのあり方においてまった く異なったものであることになるであろう

11 そしてーなる魂が同質部分的なものであれば、そこから生じた個別的な魂たちは全体として同一のエイドス(形)を持っているのだから、そのすべてが同質的なものとして生じているのであって、異なるのは 異においてのみであることになるばばならないであろう

13 そして、もしそれらが異を基体とし、その異に基づいて<魂であること>を得ているのであれば、それらの魂はたがいに異なった魂であることになるけれども、エイドス(形)に基づいて<魂であること>を得ているのであれば、それらの魂は形において一つの魂であることにならねばならないだろう

15 だが、そうであれば、多くの肉体のなかに同じーつの魂があることになり、この多くの肉体に宿るーつの魂よりも先に、多くの肉体に宿るこのひとつ別の魂もあって、その魂から多くの肉体に宿る一つの魂が生じたことにならねばならない

分有の不合理としてよいか?

21 しかし、もしーなる魂が分割されることによって、多なる魂が生じるとしたら、そのーなる魂は多くの魂へと遮い集たされ、消滅してしまったことであろう

しし、第二のばあいには、その魂は物体ではなかったであろう

25 また、その魂を複合体とみなしても、決して奇妙なことではなかったであろう

17 そして後者は、いわばーつのものに宿る一つの魂からいたるところに及んでいる影のようなものであることになる。つまり、多くの蜜蜂がーつの指輪から同じ印影を受けいれて写しだしていることになるわけである

23 しかし、その魂が(物体の)単なるパテーマ(性状)であるとしても、「魂る一つのものから生じた一つの性質が多くのもののなかにある」ということは、決して奇異なことではなかったであろう

だが、実際には、われわれの定めるところにしたがえば、その魂は非物体的なものであるとともに(性状などではなくて)ウーシアー(有)ってもあるのである

5
では、それは多くの魂のなかにありながら、どうして<一つの有>たりうるのであろうか

おそらく、<一つの有>が全体としてすべてのもの に内在しているからであるか、あるいは<全体であり一つである有>から多くの魂が生じても、その有は(一つである有として)とどまっているからであるか、いずれかであるからであろう

4 だからその有は一つであり、多くの魂はそのーつのものとしての有に還元されるのであって、その一なる有は、自己自身を多に与えかつ与えないのである

だから、「同じものが多くのものに内在している」ことになるのである

5 すなわち、その一なる有にとっては、自己自身をすべてのものに同時に提供しうるとともに、いつかなる点においても、個別的なものから切り離されては いないのである

9 それに、種子も全体であるとともに、その種子から諸部分が生じるのであって

――種子のばあいには、それら諸部分において分割されることを本性としているのであるが――

――だが、このばあいには、素材が分割をもたらすのであるけれども――

7 人は二の事実を、決して疑ってはならない

学問の全体があるとともに、その学問の諸部分も全体であって、学問は全体としてとどまっているのに、その学問から諸部分が派生してくるのである

その それぞれの部分が全体であり、全体性はがしも損なわれることなく全体としてとどまっているのであって

――それらは、素材が分割されるとともに、その種子から諸部分が生じるのであって

すべての部分が一つなのである

「しかし、学問のばあいには、それらの部分は全体ではないとは言うかもしれない

だが、それらは 気付かれないにすぎず、学問のすべての部分が、その部分に含まれているのである

12 いや、学問のばあいにも、実際に取り扱われるのは<必要のある部分>で、その部分が全面に押しだされてはいるけれども、他の諸部分も潜勢的にその部分に続いているのである

だが、それらは気付かれないにすぎず、学問のすべての部分が、その部分に含まれているのである

14 学問において全体と言われた部分と言われたりするのは、おそらくこの意味においてであろう

15 すなわち、全体としての学問とは、すべてがいわば現実態として同時に内在しているのである

17 だが、これに対して、部分のなかには、すべてに 用意されているのであるが、それは全体といわば密接に関連することによって効力を発揮するのである

19 それで、「部分は、他の諸定理から切り離されて孤立していると考えてはならないのである

20 もしそうではければ、その部分は全体から独立した 独立的なものであることになる

21 それゆえ、もしその部分が学問に属するものであれば、潜勢的にはすべての部分を持つものであることになる

23 とにかく、学のある者は、注意深く考察することによって、他の諸部分をいわば論理的な連鎖性によって推論するからである

24 それに、幾何学者も解析において、一つの定理がその定理に先立つすべての定理を自己自身の内に持つとともに

――それらの定理を通して解析が行なわれるのであるー

その定理に続く諸定理も

――それらはその定理から導出されるのであるが――

自己自身の内に持っていることを明らかにするのである

28 しかしながら、以上の伴については、われわれの弱さゆえに個じられず、肉体ゆえに漠然とした理解しかたもものとされる

だが、あの知性界においては、全体的にも個別的にも、すべてがはっきりとしているのである